

努力なくして成果なし

岡 孝

この対談は、法科大学院一般を論じているのか、それとも本学の法科大学院の現状を問題にするのが必ずしもはっきりしていないように思う。例えば、「少人数教育」のところでは、一般論に終始している。私自身は、既修者クラスは「民法判例研究1」（2クラスに分け、1クラス30名弱）しか担当していないので（毎年担当している未修者クラスは15名前後）、小人数は当たり前であり、一般論はともかく、本学ではこの点についてあれこれ論じる意味はないと思っている。公法系などでクラスの人数が多い授業があるとす

・ 2000年より学習院大学法学部法学科教授。民法担当。

れば、クラスを分割すれば済む話であろう。

対談では取り上げていないが、むしろ問題なのはあまり勉強意欲のない学生が年々増えてきているということではないのか。特に上記「民法判例研究1」では、体調不良と称して欠席する学生が目立ち始めている。とりわけ2009年度はそういう学生がかなりいた。病院の診断書を提出するでもなく、次週には平気な顔をして授業に出てくる。また、その日取り上げる判例のテーマに関連して民法の基礎知識を確認しようと思い、質問しても、答えられない学生が年々多くなってきている。自分の不勉強を恥じて基本書を読み直すことを期待したいが、残念ながらそういう学生はほとんどいないように感じている。そもそも基本書を読むという習慣のついた学生が極端に少ないのである。

私自身は、未修者クラスと起案等指導のクラスでは、毎日寝る前に30分でいいから、その日に学んだことで印象に残ったことを1,600字程度書くこと（手書きの必要はない）、そして、翌日以降その書いた内容の正確さを基本書・参考書で確認し、間違っている場合には朱を入れておくことを勧めている。この5年間で1人だけ今でも交流のある学生が、私の話をアレンジして約2年間実行したとのことである。もちろん、この人は修了後直ちに新司法試験に合格している。

未修者のクラスでも、4月入学の数ヶ月前に教科書などを連絡して予習をしておくようにと伝えているが、この5年間第1回の授業前に予習を終えた学生は皆無であった。2008年度まで、私は「民法入門1」として、主として財産法を1ヶ月で概観するという授業を担当していた。これは私が特に主張して本学法科大学院の目玉の1つとすべく開設したものである（おそらく他大学法科大学院でもこの種の授業はないのではないか）。週4日4週間で2単位の授業を終えるというものである。第1週4日分だけ質問項目を入学前に配布しておき、予習をさせようと思ったが、そもそも予習をしていた学生はいなかった。小テストも毎週行ったが（合計3回）、成果はほとんどなかった。最初に民法を集中して勉強すれば、他の科目の勉強にも役立つと思っていたが、学生はそういう意識はなく、ただ大変だ、辛いという印象しか残らなかったようである。他方同僚もこの集中授業を支持せず、昨年度は私自身も病後の体でこのような授業を行うことが大変きつかったので、2009年度からはこのような集中型授業はなくなった。

もう1点、指摘しておきたいのは、今はやりの言葉でいえば「友愛」の精神あふれる学生が本学には少なすぎるのではないかということである。私は、今某大学法科大学院で非常勤として講義を行っているが、こういうことがあった。補講時にある学生が欠席したので、自己の責任で出席しないのだろうと出席していた学生に軽く話したところ、ある学生が、待ってください、

本人はひょっとしたら補講を忘れていて自習をしているかもしれませんから探してきます、というではないか。結局どこにも見つからなかったので、授業を始めたが(のちに当該学生は補講を忘れていたとのこと)、こういう学生がいること自体、私には初めての経験であり、少人数の法科大学院ならではの感じ入ったものである。このような学生がいるために、この大学における私のクラスは、非常に明るい。もちろん、活発な議論がわき起こるでもなく、質問につねに答えが返ってくるわけでもない。しかし、この学生をはじめ数名がよく勉強しているので、最後は決まってこれらの学生に答えさせて授業を進めることができるのである。1人でもいい、こういう学生が本学にもいてほしいと思う。そうすれば、全体がこのような学生に引っ張られて明るい雰囲気になり、日々の勉強なり授業にもますます意欲がわくであろう。残念ながら、他人の欠席を気にかける学生に遭遇したことはない。

最後に、本学の法科大学院の執行部に期待したいことは、もう少し指導性を発揮してもらいたいということである。2010年度入試に関してはいろいろ課題を残したと思う。1年後に検証をぜひ期待したいところである。